

味ことばの認識に関する日英比較

山添秀剛

1. はじめに

本研究の目的は、食に関するメタファーがどのような認識に基づくかを日英比較することである。食に関するメタファーというと、Lakoff and Jonson (1980)の概念メタファーIDEAS ARE FOODが思い浮かぶかもしれない。これは、*digest the information* や *swallow her claim* などの実例から一般化される。この概念メタファーでは、食に関する知識は起点領域に属し、抽象的でわかりにくいことを理解するための素材となる。しかし、本論で明らかにしたいのは、この逆の発想である。食に関する知識、もっと言えば、味覚を我々ほどのように捉え、何に喩えて理解しているのか。この二者の違いを概念メタファーで示せば、Lakoff and Jonson (1980)が X IS TASTE を志向したのに対し、本論は TASTE IS Y を研究対象とする。a *delicious irony* や the *sweet notes of the flute* のような実例ではなく、a *gentle taste* や the *sharp taste of unsweetened cacao* などに注目する。

2. 日本語の実例——味ことばの世界

日本語のデータは瀬戸(編著)(2003)に多数見られる。まず「味ことば」を、(1)味そのものを分類する特性があり、(2)一般性がある表現と定義する。次に、「味ことば分類表」(p.29)が提示され、37種に分類され、実例が続く(pp.40-58)。豊富なデータで貴重。ただし、問題点がひとつ。文字通りの表現と比喩的な表現が混在する点だ。

これを解消するために、分類表から本論が注視すべきものを吟味する。味覚評価(1種)と味覚表現(7種)は、字義通りの味専用のことばなので、本論のデータに入れない。共感覚表現(21種)は完全に比喩的なカテゴリー。一般評価(1種)、素材表現(2種)、状況表現(5種)は、比喩的な味ことばも混在するカテゴリーと言える。

まず、完全に比喩的な共感覚表現を見よう。共感覚表現で論点はふたつ。ひとつは、通時的研究として著名なWilliams (1976)で示された「一方向性仮説」が共時的な意義展開にも当てはまるか。「一方向性仮説」は、瀬戸(編著)(2003)によると、「[触覚→味覚→嗅覚]→[視覚→聴覚]」というモデルに単純化できる。原感覚を味覚とすれば、味覚を修飾できる共感覚は触覚だけだが、瀬戸(編著)(2003)はこの反例を示す。「突き刺すような味」(触覚→味覚)だけでなく、「うるさい味」(聴覚→味覚)、「まるやかな味」(視覚→味覚)、「香ばしい味」(嗅覚→味覚)など。二つ目の論点は、共感覚表現を支える比喩がメタファーとされてきたこと。原感覚と共感覚を別個のドメインとし、両領域にメタファー写像が成立すると考える。この点も、小森(2000)、山口(2003)、辻本(2003)が反例を挙げる。「大味なロブスター」は、味覚と視覚の間にメトニミックな共起関係も想定できる。食材の大小に味覚が相関するわけだ。「大味」の対極は、「繊細な甘えび」。

また、比喩的な味ことば全般の意義展開にもどれば、「懐かしい味」なら、「懐かしく感じる」(結果)で「懐かしさを感じさせる」(原因)にメトニミー展開する。これは *healthy food* 型。また、「お袋の味」は複雑。「自分の母親の」(種)から「母親一般の」(類)にシネクドキ展開し、「母親一般の」(原因)から「母親一般が作った」(結果)にメトニミー展開する複合比喩表現。よって、メタファー・メトニミー・シネクドキの関与がわかる。

日本語のメタファーだけによる味ことばを分析すると、その表現群をまとめる発想としての概念メタファーとその階層性が想定できる。〈AはB〉は概念メタファー、「」内はその実例である。

- 〈味は生き物〉「主張のある味」「味が喧嘩する」「味を殺す」「旨みを生かす」「味の骨格」
 - 〈味は人〉「一晩寝かせた味」「優しい味」「一人前のパン」「素直なワイン」「腰のある麺」
 - 〈味は女〉「おしとやかな味」「イイ女っぽい味」「豆乳って女性らしい味」
 - 〈味は男〉「たくましい味」「がっつり男っぽい味」「甘みが少ない男らしい味」
 - 〈味は感覚〉
 - 〈味は聴覚〉「うるさい味」「味のハーモニー」「味の響き」「味の余韻」「聞酒」
 - 〈味は視覚〉
 - 〈味は光〉「濃い味」「淡白な味」「青い味」「コク(濃く)のある味」
 - 〈味は形〉「大味」「まるみのある味」「角のない味」「厚みのある旨味」
 - 〈味は触覚〉「舌を突き刺す味」「軽い味」「とろりとした飲み口」
 - 〈味は嗅覚〉「炭火の味」「燻した味」「芳醇な味わい」
 - 〈味は動物〉「獐猛な味」「凶暴な味」「嗜み付く味」「ワイルドな味」「ケモノ感あるスープ」
 - 〈味は植物〉「熟成した味」「空気と触れて味が咲くお酒」「フルーティーな味」「木目の細かい味」
- 〈味は自然〉「自然な味」「天然の味」「名店のDNA」「味の進化」「塩ラーメンの最高峰」「旨味の波」
- 〈味は物〉「えぐみがある」「味が無い」「味を足す」「独特の辛みを持つみょうが」
 - 〈味は薬物〉「病みつきになるスープ」「この味は中毒性あり」
 - 〈味は刃物〉「切れのある味」「シャープな味」「洗練された味」「磨かれた味」「刺さる一杯」
 - 〈味は爆弾〉「うまさ爆発」「旨味が炸裂」「燻製チャーシューの破壊力」
 - 〈味はスポーツ〉「一杯入魂」「パンチのあるヘビー級の味」「旨味の合わせ技」
 - 〈味は数学〉「引き算系のラーメン」「味の要素による連立方程式」「味のマトリックス」
 - 〈味は芸術品〉「味の傑作」「味のシンフォニー」「脳髓に響く味」
 - 〈味は構造〉
 - 〈味は中身〉「豆腐に味が染み込む」「隠し味」「旨みを引き出す」
 - 〈味は建築物〉「味の基礎」「味が崩れる」「重層的な味」
 - 〈味は組合せ〉「旨味と香りのバランス」「スープに麺がマッチ」
- 〈味は出来事〉「お口の中がお祭り!」「サーモンはトロトロ、エビはぷりぷり、イクラはぷちぷちで、口の中がサーカス状態!」

3. 英語の実例——ほぼ先行研究なし

TASTE IS Y という発想をなす英語表現を考察する研究はほとんど見当たらない。唯一見つかったのは Littlemore (2019: 146-147)の共感覚表現のデータである。その中から *bananas and honey* に関する1例を挙げよう。I take a bite, and ... *It smells like rain. It sounds like a deep pink/ blue noise. It looks like a beautiful, opalescent fractal. It feels like velvet all over my body.* 味覚を順に、嗅覚・聴覚・視覚・触覚で喩えていることがわかる。このような実例の存在に加え、英語でも一方向性仮説の反例があることがわかり興味深い。

以下の実例は、飲食品にまつわる販売・広告・品評などが英文で掲載されるウェブサイトから集めた。データ収集における本論での注意点は2点。まず、意外に多かったが、味覚を(典型的な)味覚で喩える例(The donut was as sweet as honey.)は除く。また、本論ではシミリーとメタファーの本質的違いは不問とし、The donut was as sweet as a lover's kiss.や The donut was a sweet tooth's dream.などの事例にねらいを定める。

4. TASTE IS Y——概念メタファー・ネットワークの階層性と実例

英語のメタファーによる味ことばを収集すると、その表現群をまとめる概念メタファーが浮かび上がる。スモールキャピタルの A IS B は概念メタファー、その後で代表的な実例のみを挙げる。イタリック部分がメタファー表現。

TASTE IS A LIVING THING the incredibly fresh, practically *alive* flavor of the beer/ The smoke *killed* flavors.
—TASTE IS A MAN a *gentle* taste/ *aged* wines/ The wine was a sophisticated *companion*.
—TASTE IS HUMAN ACTION Pineapple Cake was like *taking a tropical escape* with every bite.
—TASTE IS A SENSE —TASTE IS A SOUND European wine was like *classical music*.
—TASTE IS A SIGHT the *round* taste of chamomile
—TASTE IS A TOUCH a *light* and *smooth* taste
—TASTE IS A SMELL The beer had a *woody-smoked* taste.
—TASTE IS A GOD The tea was *ambrosia* after the slop I'd been suffering./ The chocolate cake was like a *slice of heaven*.
—TASTE IS AN ANIMAL Roast Beef with *Wild Flavor*/ Chicken liver has an intense and *fierce* taste.
—TASTE IS A PLANT a *juicy* steak/ *fruity* coffee/ *cultivated* meat
TASTE IS NATURE The curry was as spicy as a *volcano*./ The popcorn was as salty as the *sea*.
TASTE IS AN OBJECT The cheese was as sharp as a *knife/ razor*./ The wine was like *velvet* as it smugly slid down my throat.
—TASTE IS AN ARTISTIC WORK This cake was a *piece of art*./ The Tomahawk steak is a meaty *masterpiece*.
—TASTE IS A COMBINATION a delicate *balance* of flavors/ This cheesecake will delight you with its noble *combination* of flavors.
TASTE IS AN EVENT Experience a *carnival* of flavors with our sizzling hot food bar!/ The pizza was a *party* in my mouth.

5. まとめ

味を何に見立てるか、つまり〈味はY〉と TASTE IS Y の概念メタファーは、階層が上位において「生き物」「自然」「物」「出来事」が起点領域となり、日英語にて大枠で大差はない。ただし、部分的には違いがある。たとえば、〈味は男女〉、TASTE IS A GOD、TASTE IS HUMAN ACTION など。順に、ジェンダーや宗教などの文化的要因、名詞構文やスル型構文などの文法的要因がどのように関係するかは、今後の課題としたい。また、いわゆる存在のメタファーである〈味は物〉(と TASTE IS AN OBJECT) は、種類も多く、下位分類は創造的に生産性が高そうなので、日英語で差がでる部分かもしれない。この点も今後考察したい。

参考文献

- Bagli, M. 2021. *Tastes We Live by: The Linguistic Conceptualisation of Taste in English*. Walter de Gruyter GmbH.
Croft, W. and D. A. Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge University Press.
ダンチガー&スウィーツァー. 2021. 『「比喩」とは何か』(野村益寛, 眞田敬介, 山添秀剛, 對馬康博, 水野優子訳). 開拓社.
小森道彦. 2000. 「共感覚表現にみられるメトニミー的基盤について」『英語語法文法研究第7号』, 123-134.
小森道彦. 2003. 「四の皿 もっと五感で味わう」瀬戸賢一(編著)『ことばは味を超える』, 79-116. 海鳴社.
Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago. The University of Chicago Press.
Lakoff, G., J. Espenson, and A. Schwartz. 1991. *Master Metaphor List*. 2nd ed. CLG. University of California at Berkeley.
Littlemore, J. 2019. *Metaphors in the Mind: Sources of Variation in Embodied Metaphor*. Cambridge University Press.
野村益寛. 2014. 『ファンダメンタル認知言語学』ひつじ書房.
瀬戸賢一(編著). 2003. 『ことばは味を超える』海鳴社.
瀬戸賢一ほか. 2005. 『味ことばの世界』海鳴社.
瀬戸賢一, 山添秀剛, 小田希望. 2017. 『認知言語学演習(全3巻)』大修館書店.
瀬戸賢一, 宮畑一範, 小倉雅明(編著). 2022. 『[例解] 現代レトリック事典』大修館書店.
辻本智子. 2003. 「六の皿 味ことばの隠し味」瀬戸賢一(編著)『ことばは味を超える』, 156-183. 海鳴社.
Williams, J. M. 1976. Synaesthetic Adjectives: A Possible Law of Semantic Change. *Language*, 52: 461-478.
山口治彦. 2003. 「五の皿 さらに五感で味わう」瀬戸賢一(編著)『ことばは味を超える』, 120-153. 海鳴社.
山添秀剛. 2022. 「第七章 ラーメンの味ことば」瀬戸賢一(編著)『おいしい味の表現術』, 211-235. 集英社インターナショナル.